

中央アジア仏教美術とキジール石窟

長 廣 敏 雄

新疆ウイグル自治区のキジール石窟群については、二十世紀初頭のドイツ調査隊の詳細な報告、すなわちアルベルト・グリューンヴェーデル教授（一九二二年及び一九二〇年）及びフォン・ル・コックの大部な調査報告（一九二二―二六年）でよく知られている。

特に私がかねてから注目していたのは、グリューンヴェーデル教授の巨大な報告書 *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesischen Turkestan*（略号ABKT）（一九二二年）の内、三七ページから一八一ページの間に記述

されたキジール石窟群の状況である。彼が調査したのは七十一カ所の石窟であり、壁画模写二七五図と石窟測図四二である。

いったいグリューンヴェーデル教授には、既に一八九三年『インド仏教美術』の著述があり、その英語訳は一九〇一年に出版されている。ガンダーラ美術についての著述はないが、当時ガンダーラ美術の研究の第一人者アルフレッド・フーシェの影響をうけていたものと思われる。もう一つ付け加えておく必要がある。それはグリューンヴェーデルは青年時代にミュンヘン美術学校で画技を学んだことだ。前記ABKT中に多くの壁画の挿図が

載せられているが、これは彼の現地での模写画にほかならない。現地に於ては現在多くの壁画が消失している。したがってこの挿図は失われた壁画を知るための唯一の資料として学界で尊重されている。

一方アルベルト・フォン・ル・コックはグリューンヴェーデルの協力者であり、殊にキジール壁画を切りとって、ベルリンへ将来した業績はル・コックに帰すことができる。残念ながら苦心してもち帰った壁画の多くが第二次大戦によって焼亡した。

このドイツ探險隊はキジール石窟群の各窟に、画家洞、孔雀洞、海馬洞などの名称を与えた。そして調査結果からキジール壁画の年代観を組み立てた。グリューンヴェーデルの上記の著述では、現地での調査記が主であり、その印象をまとめて壁画様式と、その年代のごく大ざっぱな区切りを施したのであった。彼はガンダーラ美術を標準として、二種の様式区分をなした。即ちガンダーラ様式に近いものを第一様式と推定し、第二様式はキジール地域に特殊的要素の濃い形象を一まとめにした。

ル・コックの豪華な出版は主として、ベルリン将来の

キジール等の壁画作品断片の図版掲載と並びにその解説であった。（*Die Buddhistische Spätantike Mittelasiens* 七冊、一九二二―一九三三年略号BSAM）この出版の最終冊（第七冊、これはル・コック歿後に出版）にはエルンスト・ヴァルトシュミットが、ドイツ隊の調査結果の総括ともいふべき、表1の年代観を発表している（石窟名は日本語訳。現在の中国編号を右に記した）。このドイツ隊による年代観はもっぱら壁画様式の見地に立って設定されたものだから、石窟構築全体に対する編年ではない。これを直ちに鵜のみにするのは危険であって、私は多年この年代説を疑問視していた。しかし、ドイツ学界は今日でもこれを信じているのである。

なぜそれが分るかといえば、一九八二年春、ニューヨークのメトロポリタン美術館で開催された展覧会“Along the Ancient Silk Routes: Central Asian Art from the West Berlin State Museum”「古代シルク・ロードに沿って——西ドイツ国立美術館蔵作品展」（略称AASR）のカタログ解説は西ベルリン国立博物館東洋部長ヘルベルト・ヘルテルが執筆したのであるが、ヘルテル博士も

中華人民共和国の成立以来、中国考古学界の活動は目ざましいものになった。有名な各地の仏教石窟群は保護・修理され、さらに調査研究がすすめられた。キジールにも一九五〇年代の末に専門的な管理所が設立された。管理所の事業はさまざまだが、例えば従来登るのが不可能だった石窟には階段や木造の棧道や簡単な木製梯を架設したという。

現地調査の不可能な私たち外国人にとって何より有難

二

戦前のヴァルトシュミット説をそのまま踏襲している。ヘルテル博士たちはキジール石窟群を踏査していないのだから、従来の学説を更改するための抛りどころをもたないわけだ。

一方、わが国の学界でも二十世紀前半は専らドイツ学説を踏襲していた。否、一九七〇年代の邦人論文でもこのドイツ学説を引用していた仕末である。それは無理からぬことで、二十世紀初めの大谷探険隊の現地踏査を除けば、日本学界人の現地調査はなかったからである。

いのは、平凡社と北京の文物出版社との共同編集による『キジール石窟』全三巻（一九八三年十二月—一九八五年三月）が出版されたことである。グリューンヴェーデルとル・コックの大出版は一九三二年の完成だから、約半世紀後に、中国学者が自らの手で学術的調査研究の成果を発表して、新しい波を起こしたことになる。

中国学者はまず、キジールを地域別に、谷西区、谷东区、後山区（南区と北区）に区分し、石窟番号を谷西区の第一窟から算え始め、後山北区に至り、総数二百三十六をかぞえている。その莫大な石窟数は驚くべきものである。したがって一窟一窟の精査はとも五年や十年では困難だろうと思う。

右の平凡社刊本『キジール石窟』全三巻は主として北京大学歴史系考古実習班が一九七九年の秋、同大学宿白教授の指導のもとに行われた成果である。そして『キジール石窟』第一巻には、宿白教授執筆の「キジール石窟の形式区分とその年代」という簡明な論文が載っている。宿白教授は主として、石窟構造論を展開していて、壁画（塑像はむろん現在皆無）は論じていない。そして構造上、

表1 Ernst Waldschmidt 作製図表
(1933年出版 ドイツ探険隊報告第7巻)

	ドイツ隊の名称	中国の番号
第1様式 (西暦500年頃)	孔雀窟	76窟
	像窟	77窟
	重彩窟	117窟
	海馬窟	118窟
	画家窟	207窟
	航海者窟	212窟
第2様式 (西暦600年頃)	紅穹窿窟	{ 66窟 67窟
	階梯窟	110窟
	悪魔窟	{ 198窟 199窟
第2様式B (西暦600～650年)	暖炉窟	{ 2窟 3窟 4窟
	彩床窟	7窟
	十六帶剣者窟	8窟(西暦685年±65)
	楽天窟	38窟(西暦310年±80)
	被兜(甲)者窟	58窟
	回転経窟	114窟
	マーヤー窟2区、3区	{ 205窟 224窟
	洗足窟	206窟
	阿閼世王窟	219窟
(西暦650年以降)	花輪をくわえた鳩窟 (以下3窟あり)	123窟

繰返しているが、宿白説は「壁土中の麦ワラ蒔」という物質に基づく推論である。従って「それら壁土上層」に漆喰を塗り更にその上に壁画を描く作業の年代が、「壁土中の麦ワラ蒔」の推定年代とかなりずれることは明らかである。つまり壁画の推定年代は「麦ワラ蒔」の推定年代より遅い年代をあたるべきだろう。

しかし、誰もが気付くことは、ドイツ隊の第一様式の推定年代の「五〇〇年ごろ」という考えは、宿白説と余りにも懸絶していることだ。第一段階に於いてほぼ一五〇年の差がある。

そして第二に、疑問となるのは宿白説の第一段階のトップに位する第三八窟(楽天窟)と第三段階晩期に位する第八窟(十六帯剣者窟)とは、ドイツ隊の区分では、同じ第二様式B(ドイツ隊推定年代六〇〇〜六五〇年)に所属することである。

第三の疑問はドイツ隊の第一様式に所属する石窟群、殊に画家窟(二〇七窟)、孔雀窟(七六窟)は、宿白説では議論外とされていて全く宙に浮いてしまい、推定年代を

れ以降

与えられない。これらの窟の壁画がベルリンに将来されたため、窟の形態は破壊されたので、調査を放棄したのであろうか。要するにドイツ隊の第一様式石窟群は考察外におかれてしまったのである。

三

ドイツ隊は第一様式とみる石窟群を西歴五〇〇年ごろと推定する。これは、時代をさげすぎていると、私はかねてから考えている。ガンダーラ美術の影響がキジール壁画に著しいのはもっぱら第一様式である。ガンダーラには壁画の遺作が皆無だから、ガンダーラ彫刻とキジール壁画の様式的共通性の指摘は、厳密な意味で容易なことではない。しかしグリーンヴィンヴェーデルがキジール壁画中にガンダーラ的な香気を嗅ぎとったのは、彼の直観力の鋭さとみたい。私見では、ガンダーラ美術でもその後期に当る「インド・アフガン」(J・マーシャル卿の命名)美術の亜流がキジールへ流入したのではないのだと思う。そうではなく、ガンダーラ前期美術の衰亡は三世紀末までだろうと思うが、この前期美術がキジールへ流

表2 キジール石窟の放射性炭素C₁₄測定結果

(平凡社刊『キジール石窟(一)』宿白教授論文P.173の表に拠る)

窟号	採集標本	C ₁₄ 測定年代	C ₁₃ (%)	同位素 分馏校 正年代	年輪校合 年代 (1950)	西暦換算 年輪校合 年代
38	後室後廊前壁下層壁土中の麦藁蒔	1665±70	-22.73	1701	1640±80	310±80
6	主室前壁壁土中の麦藁蒔	1640±70	-21.14	1690	1630±80	320±80
47	後室涅槃床台下層壁土中の麦藁蒔	1615±46	-22.31	1658	1600±60	350±60
171	主室後壁壁孔内の小樹枝	1620±50			1555±65	395±65
3	主室後壁中央壁土中の麦藁蒔	1595±60	-23.97	1610	1545±65	405±65
17	後室右廊左壁下層壁土中の麦藁蒔	1540±50	-24.36	1551	1485±65	465±65
190	門口右壁下層壁土中の麦藁蒔	1430±70	-22.80	1463	1405±75	545±75
190	門口右壁上層壁土中の麦藁蒔	1345±70	-23.46	1360	1295±75	655±75
8	後室涅槃床台右端壁土中の麦藁蒔	1315±60	-23.458	1330	1265±65	685±65

キジール石窟は三段階に区分できるという。ではその年代はどうか。

宿白教授によれば一九七〇年代後期に中国考古学界ではC₁₄を応用する年代測定法が新疆の石窟年代考定の領域にまで利用されるに至った。「一九七九年から八一年にかけて北京大学歴史系考古研究室の提案により、キジール保管所の研究者たちが典型(とする)窟の窟内壁下層の壁に採集した直径二センチ未満の樹枝と、窟内側壁下層の壁土、さらに壁土中からふり出した麦ワラ蒔を、測定の標本に供す」(傍点は筆者)ことにしたという。そして「C₁₄の測定によって得られた数値を基礎として、さらにC₁₄と年輪から導かれる年代とを比較照合するという手順が踏まれた」測定結果は表2の如し。

そこで宿白教授が結論とした三段階には、次のような推定年代が当てられている。

- 第一段階 西歴三一〇±八〇〜三五〇±六〇
- 第二段階 西歴三九五±六五〜四六五±六五かつ六世紀前期に至る間
- 第三段階 西歴五四五±七五〜六八五±六五及びそ



図1 キジール画家洞の仏説法図
(グリューンヴェーデル模写)

その首長として亀茲国王とせられたのであろう。而してこの民族は恐らく亀茲へ来た最初から仏教を奉じ仏教文化を持っていたものであろう。ただ彼等は少なくとも最初は仏教、特に説一切有部を主として奉じていたこと、又亀茲の壁画には、神変を示す場合(例「画家洞」右側壁。Gr. Ibid., Fig. 344 図1)は勿論、必ずしもそうでない場合(例「画家洞」

写真を掲載してその例証としている。
ここに例示された写真のうち「画家洞」仏説法図(図1)については、後述する議論に深い関係があるので、注目されたい。
干潟先生は、この天山南路の古代民族について、更に次のような新説を提出している。それを引用しよう(前

掲誌九二頁)。
「(イタロー・ケルティクを話すローマ系の民族が天山南路の地域——干潟先生は主として亀茲国を指す——に定着した時期の問題。)少なくとも後漢代西紀九一年、班超が白覇を亀茲の国王とした頃には恐らくこのローマ系民族がこの地方に相当の集団をなし、勢力をもっていたので、白覇は

ここで話題をかえる。
干潟龍祥先生の数年前に発表された論文「九世紀までの中央アジアの主住民とその宗教」(「日本学士院紀要」第三十八巻第二号、昭和五十七年十一月)を紹介し、私見を述べたい。
干潟先生はタクラマカン砂漠の北道、つまり天山南路沿いの主要地点に注目する。即ち西よりアクス(姑墨)、

クチャ(亀茲)、烏壘、カラシャール(焉耆)、カラホジャ(高昌)の諸地域は、「少なくとも紀元後は、その文化の指導的地位にあった主住民はイタロー・ケルティク語を話す白哲人で印欧人の一種で」(同誌九〇頁)あること。そして「絵、画等に見られる仏、ボサツ等其他主要人物の容貌より見る時、印欧人中、ローマ系に近い民族であったと思われる」(同誌九〇頁)として論文挿図にル・コック収集の「キジール」龕の窟「Nischen-Höhle」の上方の石窟出土木の板絵の仏像、七世紀(長廣注・ドイツ隊の編年。以下同じ)並びにグリューンヴェーデル前掲書(A B K T)のキジール第二区マヤ洞(七世紀、八世紀)壁画(グリューンヴェーデル模写)「マガダ国大臣雨舎が阿闍世王に釈尊の入滅を知らすために工夫をこらした物語の場面」(Gr. Ibid., Fig. 383)。更にグリューンヴェーデル模写のキジール「画家洞」右側壁の説法図二個(Gr. Ibid., Fig. 344, 345)。同じく模写のキジール供養者列像図(十六剣士洞)Gr. Ibid., Fig. 116。ル・コック前掲書キジール第二区マヤ洞(七世紀、八世紀)壁画「トソツ天における弥勒とその衆会」(Le Coq, Ibid. VI, Taf. 17)。以上六個の



図2 パイターヴァ (3~4世紀)

解説として「ショトラック出土焰肩仏と双神変像」と題する小文を載せ、焰肩仏の仏像名は「現在賢劫千仏名経」または「十方千五百仏名経」にみえる、と指摘している。カーブル美術館蔵のショトラック出土「燃燈仏の足下には儒童が布髪している」から、焰肩仏とは必ずしも個有仏名号ではないとも考えられる。とにかく、ここに焰肩仏という仏像形式が、(キジール地域からカーブル地域に至る)二地域に分布していることを知ったのである。

次に干潟先生はいう(同誌九三頁)「(カーブル近傍の焰肩仏は)何れも四世紀の作と思われる。それで以下は全く予の想像だが、ローマ系の民族の大集団が、早く一世紀

初め頃から、このカーブル近傍に来ていて、そこで仏教、特にには説一切有部を奉じていた。その一部の集団が一世紀の中頃にか、カーブル地方から東北へ出て、バクトリアの傍らを通り、カシュガルへ出て、アクス(姑墨)に進み、龜茲に、少なくとも一世紀中頃に定着し、更に東の方、烏嚩、焉耆、高昌へと進んだものであろう。(中略)その後、時々彼等の第二の故郷なるカーブル地方から、同一民族の移住があり、又、連絡があり、同一系統の文化の移入があったものと思われる。」(傍点筆者)

干潟説は、だから、「カーブル地方で少なくとも四世紀前後以後、両肩の背後から焰を出す仏像が流行していたのを龜茲地方の人が模倣したのであるう」(同誌九三頁、傍点筆者)と推測しているのである。

五

以上の干潟説ではあまりに想像にすぎる。(先生自身もみとめているが)論旨の弱点は、アフガニスタンのパイターヴァ及びショトラックの僅か数例にすぎない焰肩仏、しかもほぼ四世紀とみられる作例が、干潟説では七世紀

右側壁。説法図 Gr. Ibid., Fig. 340)とも、両肩の背後から火焰を出しているのが多い」(傍点筆者)

干潟先生は、「両肩の背後から火焰を出す仏像」をキジールでは「画家洞」の二例しか挙げていないが、たしかにキジールには「多い」のである。グリユーンヴェーデルの前提書では、索引にも Flammen hint d. Schulth. d. Buddha の一項目をあげている。私の調べたところではキジール「十六剣士洞」かまぼこ天頂「飛行仏」。「回転経窟」左右側壁の説法仏。第三区「マヤ洞」前室。前記「画家洞」ではグリユーンヴェーデルの模写した説法仏が以下十図ある。Gr. Ibid., Fig. 339, 340, 341, 342, 343, 344, 351, 352, 353, 354.

さらに平凡社版『キジール石窟』全三巻(一九八三—八五)の図版によって補記すると、次の諸窟にも「両肩の背後から火焰を出す仏像」があることが分った。

「楽天窟」(第三八窟)窟頂の立仏

「海馬窟」(第一八窟)同右

「花輪をくわえた鳩洞」(第二三窟)主室左壁「立仏」

「小穹窿洞」(第二九窟)正壁「仏伝」

「前第二窟」(第一八九窟)主室左右壁「仏伝」と前壁右「立仏」と窟頂

「阿闍世王窟」(第二一九窟)仏伝

クムトラ石窟群⁽³⁾では、グリユーンヴェーデル第十九洞、ナガラジャ洞天井「飛行仏」北谿谷左洞の「飛行仏」

ムルトック第二区第三洞、Gr. Ibid., Fig. 620

同 同 同 Gr. Ibid., Fig. 621

干潟先生の論文はこれからさがが問題となる。左に引用する。「この(両肩の背後から火焰を出す)仏像様式の例は、インドでは勿論、ガンダーラ地方でも、見当たらないようである。ただアフガニスタンのカーブル近傍のパイターヴァアーや、ペーグラム、ショトラックなどから、彫像で肩から焰を出したのが数々見られる。」(同誌九二頁)と記述して、先生はパイターヴァアーの二例(一例は Hacken, Afghan. Fig. 28 図2、一例は「仏教芸術」一一七号、口絵8)。ショトラックの一例は「仏教芸術」一一七号、口絵7から転載している。「仏教芸術」一一七号の口絵については、同雑誌(一九七八年)に高田修氏が図版



図3 コータン近傍カラサイ出土

ところが、ここに焰肩仏と称しうる中国の古式金銅仏の作例が一体、現在ハーバード大学フォッグ美術館に所蔵されている。坐仏であって高さ三二・九センチ(図4)。出土地は河北省石家荘付近というが、正確ではない。⁽⁶⁾顔といい坐形の衣文といい、一見、ガンダーラ仏の亜流であることは明ら

だが干潟先生が、余りにも「焰肩仏」に拘泥して、「カール地方の技術者と亀茲地方の画家とが同系統」(同誌九五頁)だと極論したり、また技術者のみならず、両地の民族がほぼ同じ文化をもつ民族即ちローマ系民族であったらうとまで論及するのは、如何かと思うのである。しかし私は民族論は門外漢だから、これ以上は追及したくない。

六

両肩の背後から火焰を出す仏像(以下、仮りに焰肩仏の名を借用)の作例は、決してカール近傍の石仏及び天山南路のキジール周辺に限らない。新疆ウイグル自治区ではコータン近傍ラワック塔址やカラサイから出土した焰肩の小塑造仏がオーレル・スタイン卿により発見されている(図3⁽⁵⁾)。年代は五世紀初め。これは

バイターヴァ・ショトラック石仏とは全く様式を異にする。いわゆる中央アジア式で、強いていえばグプタ式とガンダーラ後期式の混合である。

後半とみるキジール第一様式の「画家洞」その他の焰肩仏に「模倣されている」では、余りに時代がひらきすぎているのである。

干潟先生は、この弱点を補強するため、次の仮定を立てる。すなわち「現在、亀茲地方の(石窟壁)画は極早いのも五世紀で、大抵は六世紀以後のものだが、それらはそれより早く四世紀頃には一旦出来ていたのを、それが古くなったので塗りつぶして、再び原のように書き直したのが少なくないのだと思われる。(中略)従って両肩の背後から火焰を出した仏像も早く既に四世紀頃から亀茲地方にはあったものであるう。」(同誌九三頁、傍点筆者)

この記述はきわめて架空的で、キジールの作例をアフガニスタン(バイターヴァとショトラックの)の作例の年代に近付けようとする下心から出たものに過ぎない。それというのも、もともと、キジール壁画の年代観が必ずしもドイツ隊の見解にもフォローせず、はっきりした根拠に根ざさないからである。前述の如く私のキジール年代観は宿白教授の立場を補正して、キジール壁画の初期段階を四世紀初め(「画家窟」などの年代)とする。そうす

れば干潟先生の想像説は無用になるのである。

さらに干潟先生は四世紀頃のキジール壁画の「焰肩仏」を力説するために、仏教史の事実を傍証にもち出している。それは他でもない。亀茲生れの高僧鳩摩羅什(三三二—四一三年)も「その本国(亀茲国)に居る間に、かかる肩から焰の出た仏像を常に見て居たであろう。それで彼がかの阿弥陀経の梵本 *Sukhāvatīyū* を訳する時に、その中に出て来る *Maharajikandha* を大焰肩仏と訳したのであるう。」(同誌九五頁)

この干潟先生の発言は、仏教史には門外漢の私にとつて、興味深い。鳩摩羅什は少年の頃、北インド罽賓で修行を積み、キジール帰国後は国王以下の絶大な信頼を受け、キジール王は黄金の獅子座に「大秦錦褥」(ローマ領で製した錦のしとね)をかけた上に、羅什を坐せしめて、説法をきいた、と伝える。このことから、羅什が四世紀の中央アジアの仏教文化にひろく精通していたことが推察できるが、同時にキジール宮室には「大秦錦褥」が象徴するように、ローマ領内の文物が伝来していたことも分るのである。



図5 雲岡第6窟（北魏）

(1) フォッグ美術館の金銅坐形の焰肩仏——ほぼ西暦三〇〇年

以上を整理し、年代の順を追って分布状況を示せば左の如くなる。

ればガンダーラ第一期様式の仏像が、タリム盆地の南北いずれかのルートを経て中国に（恐らく西域僧の手で）伝わり、この中国最古の焰肩仏を創造したのだ。
こうみてくると、干潟先生がアフガニスタンのカーブル地方の例を天山南路のキジール地方の例に結びつけた焰肩仏のルートは、唯一のものではなかったのだ。そして焰肩仏製作者がこの両地方のみに居住して、その共通の文化の運び屋であったとする結論は、事実と合致しないのである。

かである。そして両肩（及び腕の付け根）の背後に各四個の焰光をつけている。私は従前この焰光を、古代の羽状形と説明したが、今それは訂正する。思うに、金銅仏の場合、石仏や壁画の如くには焰光をなめらかに製作できなかったのだ、この形になったのである。
この金銅仏は無銘で正確な年代は分らない。しかし後趙・建武四年（三三八年）銘の金銅仏坐像（サンフランシスコ市ド・ヤング美術館ブランド・コレクション）に比べ



図4 金銅仏坐像（フォッグ美術館蔵）

て、これは年代が早いことを認めてよい。前者はいかにも中国的形姿であり、後者は中央アジアを越えて、ガンダーラに近い。一般には四世紀前半としているが、私はむしろ三〇〇年ごろと見たい。

いったい中国古式金銅仏は、五胡十六国時代の乱世に製作され、ほとんどが小型である。やや大型でガンダーラの垂流とみられるのは、京都府有鄰館蔵の金銅立仏像とこのフォッグ美術館蔵の坐仏像の二体しか知られていない。前者は剛健な感じで、いかにも五胡十六国時代らしく、

後者はそれに比して数段気品があり、静寂の趣がある。恐らく西域僧の指導により、ガンダーラ仏の石像をまねて製作したのだろう。伝えによる石家荘附近出土をみとめるとしても、その地で製作したのではなく、長安あたりで製作し、のちに移動されたのではなからうか。

このフォッグの金銅坐仏像の祖型は、必ずやガンダーラ第一期（マーシャル卿）作品にちがいない。だがガンダーラ石仏には焰肩仏の作例は見当たらないのである。とす

- (2) カーブル近傍（PとS）の石造立像の焰肩仏——三世紀～四世紀
- (3) キジール早期窟（画家洞）の壁画焰肩仏——四世紀初
- (4) コータン・カラサイ出土の塑造立像の焰肩仏——五世紀初
- (5) 敦煌北魏窟の塑像と壁画の焰肩仏——四四二年以後⁽⁸⁾
- (6) 雲岡石窟の石仏の焰肩仏——四六〇年以降⁽⁹⁾（図5）
- (7) 龍門賓陽洞本尊坐仏の焰肩仏——五〇五年—五二三年
- (8) 北魏石仏——一例として太安三年（四五七年）宋徳興造仏坐像

むすび

焰肩仏は個々の仏名ではないようだ。前述した鳩摩羅什訳「阿弥陀經」には南方世界、北方世界、上方世界のそれぞれに「有焰肩仏」とか「有大焰肩仏」とかが記されている。なぜ、またどこからこの「両肩に突出する焰」のアイディアが生じたのか、しかもアフガニスタンから中央アジアに流布し、さらに中国北魏時代の仏像にまで

ついでまわったのか。

一部の人がいうように「カピシ地方（アフガニスタン）で発達した特異の地方様式」（『仏教美術』一一七号所載論文による）と簡単に片付けることはできないのである。

（一九八六年三月二十八日の講演内容を補訂）

註

- (1) Le Coq, *Buddhistische Spätantike V*, Taf. 7. A. S. R. 第三九図 (MIK III 7591) 解説によればこの板絵上部に Arshian-B. 語の銘文がある。曰く「この仏はサンケータヴァ Sankeṭava の手によって画かれた。」
- (2) 石窟年代について、干瀉先生は「画家洞」七世紀後半。「第二区マヤ洞」七～八世紀。「十六剣士洞」は無記載とするが、これはドイツ隊の年代観とも異なり、その典拠不明である。
- (3) Gr. Ibid., Fig. 38. ナガラージャ洞は挿図なく、本文三四ページ。北谿谷左洞も挿図なく、本文三五ページ。平凡社刊（一九八五年十月）『クムトラ』では中国編号窟で左記の仏が「両肩の背後に火焰を出す」。第二三窟主室左後部「仏伝」（第五〇図）、同前壁（第五二、五三図）、同右壁仏伝（第五四、六〇図）、右廊左壁立仏（六七図）、第四三窟主室窟頂（第七四、七五、八一、八二、

八三図）、第五〇窟主室主尊（第二二五図）、第六三窟主室窟頂（第一四四～一五五図）、一五九図、一六四～一六六図）、仏説法図 MIK III 9024（第二〇〇図）。

- (4) ドイツ探検隊では、グリーンエンヴェーデル、ル・コック、ワルトシュニミットの三氏に三様の年代観の差がある。平凡社刊『キジール石窟』第三巻に晁華山「二十世紀初頭のドイツ隊によるキジール石窟調査とその後の研究」の文中、表3に右ドイツ学者の三様の年代対照表を掲げているので分るように、グリーンエンヴェーデルは第一期を西暦三〇〇年から三五〇年前後、第二期を四五〇年頃から七五〇年まで。ル・コックは第一期五〇〇年から六八〇年頃まで、第二期は引き続き七五〇年ごろまで。ワルトシュニミットは前掲した如くである。干瀉先生が「最も早いものは五世紀」と推定するのは、ドイツ隊の誰の説にも当てはまらない。

- (5) Sir Aurel Stein, *Serindia* vol. 4, pl. 10 リンク塔址の焰肩仏は塑造坐像 (A. Stein, *Ancient Khotan*, Pl. XXXII)

- (6) このフォッグ金銅坐仏はもとニューヨークのウインズロフ (C. G. Winthrop) の旧蔵。石家荘方面からの将来というのは水野氏が多分古美術商から買ったのだらう。ただ水野氏は、この金銅坐仏が「あらゆる点からガンダラー的である」としながら「この像はあくまで中国の仏像である」（水野清一著『中国の仏教美術』（昭四三年刊）

三〇頁）と述べるのは、ガンダラにはこの種の金銅仏が遺存しないという理由をいつているつもりかも知れぬ。なお水野氏はこの仏像の両肩から出た焰光については全く触れていない。これは大きなミスである。

- (7) 講談社発行『中国美術』第三巻『彫塑』（昭四十七年十一月刊）図版七の解説。

- (8) 『敦煌莫高窟』（平凡社刊）巻一、巻二の図版によれば、敦煌における焰肩仏の表現は左の諸窟にみられる。

（塑造仏で壁面光背の場合と壁面仏像の場合がある）

- 北魏 (1) 第二五七窟 (2) 第二六三窟 (3) 第二六〇窟 (4) 第二四八窟
- 北周 第四三八窟
- 隋 (1) 第四一九窟 (2) 第四一〇窟 (3) 第二八二窟
- 唐 (初唐) 第三二九窟

- (9) 雲岡石窟では光背の損傷が多いが、左の如く、最初期から焰肩仏がみとめられる。

- (1) 第二〇洞大仏 (2) 第十七洞西脇仏坐像 (3) 第十三洞南壁七立仏 (4) 第六洞（殆ど全部の仏像）

附言「両肩の背後の焰光」を以て火焰光背の起原とするのは、誤り。後者の問題は別個として考察しなければならぬ。

（ながひろとしお・京都大学名誉教授）